

17 占領期における急性感染症の発生推移 (一九四六年—一九四八年)

田中誠二・杉田 聡¹⁾
 森山敬子・丸井英二³⁾

¹⁾順天堂大学医学部

²⁾大分大学医学部

³⁾西南女学院大学保健福祉学部

連合国占領軍総司令部公衆衛生福祉部 (GHQ/SCAP/PHW) が、占領期の保健医療改革に大きく関与したが、彼らの関心事の一つに、コレラや赤痢、チフスなど急性感染症の流行を食い止めるための防疫活動があった。一九四五年九月二二日、厚生省に對して提出された「公衆衛生対策に関する覚書 (SCAPIN-48)」には、厚生省が GHQ に對して提出すべき情報についての指令、及び緊急にとるべき施策についての指示が記されており、その中で、疾病蔓延状況の調査や各府県毎の伝染病の報告を指令した。

われわれは、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている GHQ 文書 (マイクロフィッシュ) に存在する Weekly Bulletin から、急性感染症に関する史料を選出し、その研究を行っている。現在、マイクロフィッシュからコピーとして文書を焼き付け、その文書を電子ファイル化する作業を進めている。

この報告では、既に電子ファイル化が完了している終戦直後の一九四六年から一九四八年までのデータから、当時の急性感染症発生推移を地域別に把握し、その広がりの特徴を考察する。これまで、占領期の各種感染症に関する系統だった報告はされておらず、未知なる部分が多い。当時の統計報告を丁寧分析することによって、占領期の感染症対策の実態を解明するための第一歩としたい。

報告された疾患は、「ジフテリア」、「赤痢」、「腸チフス」、「バラチフス」、「天然痘」、「発疹チフス」、「マラリア」、「コレラ」、「猩紅熱」、「流行性髄膜炎」、「日本脳炎」の全十一種類であり、それぞれの都道府県別・月別データを用いて分析を行った。

全国における罹患率の推移を見ると、「ジフテリア」、「赤痢」、「腸チフス」、「パラチフス」、「マラリア」では経年的に減少しており、季節性が見られた。一方、「天然痘」、「発疹チフス」、「コレラ」は一九四六年に、「日本脳炎」は一九四八年に、それぞれ散発的な流行が見られた。

「マラリア」、「コレラ」、「日本脳炎」以外の八種は、当初から都道府県別統計が記載されたが、これら三つの疾患については一九四六年六月より記載に加えられた。このうち「マラリア」の発生推移を見ると、一九四六年の夏には、四国・九州地方で罹患率が特に高いが、感染の広がり是全国的な規模で見られる。これは、マラリア流行地域からの引揚者が国内を移動したことによる影響を考えることができるであろう。一九四七年、一九四八年と時間が経つにつれ、各都道府県の罹患率は確実に低下している。しかし、滋賀県のみ罹患率は下がらず、むしろ増加を示している。マラリアを媒介するシナハマダラカが琵琶湖沿岸で多く生息したことが原因であろうと思われる。

戦争や貧困、飢餓など社会的悪条件下で流行するとされる「発疹チフス」は、一九四六年の三月、四月に高い罹患率を示している。四月には東京都で罹患率が特に高く、兵庫県、大阪府と続く。人口が密集し不衛生な状態にあった大都市で感染者が多数発生したことが考えられる。

「腸チフス」は、夏から秋にかけて罹患率が高い。一九四六年の夏には全国的に感染が広がっているが、一九四七年の夏には特に中部地方南部から近畿地方にかけて集中している。また、三年間を通じ、他の地域に比べて九州地方の罹患率が低い。

終戦直後の各疾患における流行の特徴は、「人」、「時間」、「場所」を総合的に捉えながら、当時のDDT散布による媒介昆虫の駆除活動や予防接種プログラム、その他各種の衛生環境改善の取り組みに配慮しつつ考察していく必要がある。本報告では、こうしたことを踏まえ、疾患毎の発生状況を明らかにしたい。